



# A L P S CAREER

＜シリーズ連載：今求められるキャリア開発 第36回＞

## 公務員にこそ キャリアデザインの 視点を！ ～転機での舵は自分で切る～

はじめに

新聞やインターネット等でキャリアデザインという言葉を目にする機会が増えました。私がこの言葉を初めて知った8年前とは格段の差を感じます。

振り返ってみれば、私が採用された1980年頃は、役所に採用されるのは卒業後すぐの者がほとんどでした。自分も例外ではなく、公務員として仕事を覚え、公務員として住民に接し、公務員として生きることのみで半生を過ごしてきましたので、自分の「公務員としての生き方」を何ら疑うことはありませんでした。将来のことについても、特に具体的に思い描くことなく、ただ漠然と6歳まで勤め上げ、定年で退職するのだろうかというイメージしか持っていませんでした。そして、それが世間の一般的な意識であり、常識だと思っていました。ところが、私にも転機が訪れ、自分の人

生（キャリア）だからこそ、自分でデザインしていくことの必要性に気付かされました。今日は、私の体験談をお聞きいただくことにします。

**自分の組織の常識は他の自治体の常識ではない！**

2003年4月から約3か月、私は、自治大学校で他の自治体の皆さんと研修を受けることになりました。これは決して自分から希望して受講したのではなく、あくまでも上司から指示されたものでした。ご承知のように自治大学校は、自治体職員に対する専門的な研修を実施するために設置された総務省所管の機関で、ちょうど東京都立川市に移転、開校したところでした。私は、そんな新築早々の校舎の寄宿舎に入寮して研修を受けることになったのです。

この研修で私にとつての最大の収穫は、同じ自治体でも規模や風土、沿革等様々な



寺本 伸市  
大阪府福祉部障がい福祉室  
地域生活支援課

【てらもと しんいち】1962年大阪府出身。1981年4月大阪府入庁。2003年自治大学校監査専門課程第4期修了。2005年財団法人関西カウンセリングセンター認定キャリア・コンサルタント。自治体職員有志の企画実行委員。

要因によって大きく異なることを知ったことです。それまでの私は、他の自治体の方と親しく話をする機会ほとんどありませんでしたし、そんな自分に何一つ疑問や不足を感じていませんでした。ところが、日々の研修カリキュラムや共同生活を通して聞くそれぞれの地域での課題やそれに対処するための取組は実に様々でした。

最初のうちは目新しさ中心で聞いていた私は、次第に何かモヤモヤと居心地の悪さが湧き起こってくるのを感じました。それは、自分の組織での常識が必ずしも他の自治体の常識ではなく、今までいかに狭い世界のことしか知らなかったか分かってきたからです。恥ずかしながら、目から鱗が落ちる発見で、遅ればせながら外の世界に目を向け始める契機となるものでした。

いったん自分の組織の常識に疑問を持ち始めると不思議なもので、住民からの苦情等にもそれまで以上に耳を傾けられるよう



になりました。そうすると、自分たちの言い分より相手の話の方がまともではないかと感じられることもあり、自分のなかでの葛藤は増えましたが、より深く仕事に向き合えるようになった気がします。

### エンプロイアビリティ

次の転機は、キャリアをデザインするという概念を学んだことで訪れました。2004年の秋、これもふとした動機から、財団法人関西カウンセリングセンターが開講するキャリア・コンサルタント養成講座を受講しました。キャリア・コンサルタントは2002年に厚生労働省が打ち立てた「キャリア・コンサルタント5万人計画」により生まれたもので、個人が、その適性や職業経験等に応じて自ら職業生活設計を行い、これに即した職業選択や職業訓練等の職業能力開発を効果的に行うことができるよう個別の希望に応じて相談その他の支援を行うとされています。

この講座で、世間では転職が日常茶飯事となっており、継続して雇用されるため、エンプロイアビリティを高めることが求められる時代になっていることを知りました。エンプロイアビリティとは「雇用され得る能力」のことで、いったん企業に採用されても雇用が保証されているわけではなく、雇われ続けるためには組織が求める能力を有し続けなければならないという考え方です。しかも、雇い主が丁寧に人材育成してくれる時

代は過去のもので、働く者が自己責任において能力を高めていかなければならないというわけではありませんか。

半信半疑で民間企業の平均勤続年数について調べてみると、十数年と書かれている資料を見つけました。冒頭に書きましたが、公務員一筋で生きてきて、転職などまったく考えたことがなかった私にとって、青天の霹靂でした。転職はさて置き、自分が組織の求める能力を備えているかといったことや、計画的に能力開発に取り組もうとする意識はあまりありませんでした。自分が知らない間に世の中の流れから取り残されているように感じ、背筋が寒くなるのを覚えました。

### 公務員にこそキャリアデザインの視点を！

たしかに、終身雇用制が残る公務員の世界では、定年まで働き続けることは今でも難しいことはありません。しかし、「雇用が保証されているが故に、自分がどう生きていくかという命題と向き合う機会を逸しているのではないだろうか。恵まれた雇用環境に安住することで自分らしく生きるチャンス逃してしまっているとすれば大変なことです。私も、異動の辞令が出たら指示された職場の席に着き、指示された仕事をこなすことが美德と考えていました。でも、これは極めて他律的な姿勢です。終身雇用が残る公務員だからこそ、より一層自律的

にキャリアデザインに取り組む視点が必要に違いありません。

「人は、自分の能力や適性が職業に求められるスキルと一致するほど、仕事に対する満足感が高まる」と学びました。転職とまではいなくても、自分がどんな分野の仕事に関心があるかを自覚することは大切です。もちろん、どの職場に配属されるかを自分で決定することはできず、人事異動に委ねざるを得ませんから、普段は自身自身についての理解を深めることや、興味を湧く仕事はどのようなものを思い描くことから始めることとなります。私も、これまでの仕事を振り返って自分がどのような仕事に向いているか、どのような仕事にやりがいを感じるかといったことを初めて問われたときは答えに窮しましたが、一度整理してみると自分のなかで仕事に対する地盤が固まるように感じました。

最近では、自治体でも職員の能力を活かすことや、チャレンジ精神を人事に反映させる制度の導入が進んでいますので、そのような機会を活用するのもいいでしょう。

やりたい仕事が見えてきたら、関連する知識や技能のスキルアップに努め、来るべき転機に備えましょう。お金はかかりませんが、自分に対する投資として、年収の何パーセントかを自己研鑽に費やすことは一般的なことだそうです。また、機会を捉えて上司や同僚等周囲の人たちに自分の関心があることを発信することも好機につながります。



## 計画された偶発性

好機につながる可言えば、私の好きな言葉に「計画された偶発性」という学説があります。これはアメリカのクランボルツ教授が提唱したもので、ある人に起きる出来事は一見たまたま起こった（偶発）ように見えるが、実はその人に起こるべきとして起きているのであり、普段から転機に備えて準備し行動しているからこそ、チャンスが巡ってくるのだというものです。なんとも将来に希望を持てる素晴らしい考え方だと思いませんか。

たしかに自分の周りを見渡したとき、なるほどこの人ならこの職場だと納得する人事異動が少なくありません。アンテナを高く張って情報を集め、意識を高く持つて努力している人ほどその傾向が強いように感じます。後になって、あの人は前からあの仕事をしたと言っていたと聞くこともあります。案外、キャリアデザインを実践している人は身近にもいるのかもしれない。

キャリア形成は一直線に進むものではなく、遠回りや寄り道することもあって、好機に備える姿勢や意気込みは失いたくないと思います。

## 民間実務研修

さて、私の話に戻します。2007年1月、異動の時期を迎えていた私は、今が転

機だと考え、庁内の公募制度で民間企業での研修制度に応募しました。もつと外の世界のことを知りたくなり、そのためには実際に企業で働いてみて、公務員の世界との違いを実感したかったからです。運よく研修に採用された私は、同年4月から2年間、府内の企業での仕事に従事しました。

この間、最も身に染みしたのは、「企業は稼がなければ存続できない」ということです。当たり前と言えば当たり前のことですが、収益を上げなければ、従業員の給与や建物の賃料、光熱水費といった固定費すら払うことはできません。役所では、厳しくなったものの税収があり、カットされたと言いなながらも給与が支払われることは常識ですが、企業では決して保証されているものではなく、自汗をかいて成果を上げないといけないのです。良い材料を安価でかつ安定して仕入れること。運送や梱包のコストを削減すること。顧客ニーズに応えられる製品開発に努め顧客満足度を高めること。ありとあらゆる分野で連日連夜絶え間ない努力が重ねられていることを知り、民間企業の厳しさを知りました。

現に、勤務先の隣にあった会社が、ある日平日の昼間にもかかわらず、電灯が消えて誰もいなくなっていました。どうしたのかと不思議に思っていると、夕方には倒産したことを告げる紙が貼り出されていました。

私が見たこと、知ったことは企業活動のほんの一端であり、実際にはもつと壮絶な

現実があるでしょう。公務員は恵まれていると改めて痛感する一方で、仮にも公務員として採用されたわけですから、自分は何ができるのか、何をすべきかを常に問い続け、実践していくことの責任を再認識する経験となりました。

## 自治体職員有志の会

話が前後しますが、キャリアデザインに取り組んでいる自治体の例を調べていて、財団法人地方公務員等ライフプラン協会（当時）のことを知りました。自分の知らないところで公務員の世界も変わろうとしているのだと感動したものです。「ALPS」（05年2月号）を手にしたところ、「受け身の『地方公務員』から自律的な『自治体職員』脱皮を目指して」というタイトルで「自治体職員有志の会」のことが紹介されました。サブタイトルには「自治体職員の『キャリアデザイン』を考える」という文字が躍っているではありませんか（私には本当に躍っているように見えました）。お、これだ！とさっそく入会希望のメールを送りました。

自治体職員有志の会（以下「有志の会」）は、自治体を取り巻く環境が大きく変わるなかで、自治体職員として個々人が主体的に、地域の発展を担うための自治体のあり方とそれを支える自治体職員像を考え、志を同じくする職員が協働して「脱お役所仕事」を実現していくことを目指し、その名

自治体職員有志の会  
第9回シンポジウムin福島

日程：2012年7月21日（土）  
会場：福島県飯坂温泉  
パルせいざか  
テーマ：私たちは今、福島に集う。やっ  
ぺ！仲間とともに  
～原発問題を抱えた福島の真  
実を知り、復興に向けた行動  
を本気で考える～

※詳細は「自治体職員有志の会公式HP」をご  
覧ください。

のとおり有志で結成した会です。現在全国に約800人の会員がおり、普段はメーリングリストで情報や意見を交換するとともに、年に2～3回のオフ会と年1回のシンポジウムを各地で開催しています。

オフ会やシンポジウムで他の自治体の方と膝を突き合わせて交流すると、「ああ、みんな頑張っているのだな」と明日へ向けての元気をもらうことができ、私にとって貴重なエネルギー源となっています。

有志の会第9回シンポジウムin福島

今、私は、有志の会企画実行委員の一人として、2012年7月に福島県で開催する予定の第9回シンポジウムの準備に携わっています。シンポジウムで取り上げるテーマは、毎年、時勢を見ながら検討するのですが、今年はやはり東日本大震災からの復興に自分たちが何をできるのかについて考えてみることにしました。震災から1年以上

が過ぎ、残念ながら自分の周囲では震災を話題にすることがめっきり減りました。しかし、現地では今もなお日常の生活を取り戻すための闘いが続いています。今一度、福島の方々の生の声を通して、一転した宮城の実態や復興への取組の真実を知り、私たち自治体職員一人ひとりが、同じ日本に生きる仲間として、福島で生きていくことを支えるため何ができるかを考え、これからの自らの行動を決意する契機としたいと考えています。

2012年

4月14日、私はシンポジウム会場の打合せ等のため、初めて福島県の飯坂温泉を訪れました。何もできないのに安易に被災地を訪れることに後ろめたさを感じていましたが、現地では県外からの観光客が激減するなど今も震災や原発事故の影響が深刻だそうです。あれこれと頭のなかで考えているより、自分の目で見て自分の耳で聴いて実感するた



飯坂温泉に向かう電車の前で

め行動することの大切さを実感し、もっと早く足を運ぶべきだったと悔やんでいます。このシンポジウムには、有志の会の会員でなくとも参加いただけます。よろしければ、皆さまもぜひご参加ください（左上表）。

転機での舵は自分で切ろう

こうやって振り返りますと、やはり「計画された偶発性」の存在を信じざるを得ません。ちょっとした偶然で転機が巡ってきたとき、勇気を持って一歩足を踏み出すと、一転して新しい世界が拓けることがあります。私たち公務員は比較的变化の少ない日常を過ごしているからこそ、外の世界を知ることには貪欲になる必要があると考えます。

大阪府では2012年3月に職員基本条例等が成立し、人事評価を絶対評価から相對評価に転換することになりました。その結果は任用、給与又は分限に反映されます。また、今後「大阪都構想」が実現すると、現在の大阪府はなくなるのかもしれない。

突然ですが、皆さんはもし急に公務員を辞めざるを得なくなったら、別の仕事に雇われる自信はありますか。ご自分にエンブレイアビリティは備わっているでしょうか。決して悲観的になる必要はありませんが、少なくとも自分が持てる力を発揮できているか、自分らしく生きることに向き合っているか自問してみたいと思います。かく言う私も、あるべき姿と現実の間でもがいている一人なのですが。

夢や希望は必ず叶うとは限りませんが、持たない限りは決して叶うことはありません。自分の人生なので、自律的にキャリアをデザインし、転機での舵は颯爽と自分で切りたいものです。